

# 松平忠周の所司代就任と幕府発給文書について

——信濃国上田藩松平家文書の内の所司代関連文書の紹介を中心に——

東 谷 智

はじめに

譜代大名が就任する役職のうち、老中に次ぐ格式を持つ所司代<sup>①</sup>に関する研究は、その役割に比して十分な研究成果が蓄積されているとはいえない。従来の所司代の研究は、朝幕関係や寺社支配を論じる際や、近世初期と幕末維新时期における政治史的関心から関説されるのみであり、所司代を正面から取り上げ、諸機能・諸権限や行政機構を説明するという基礎的な研究は大きく立ち後れている。その理由は史料の伝来状況に規定される面が大きい。京都の所司代屋敷において集積されていたはずの所司代文書がほとんど伝来していない<sup>③</sup>。また、所司代に就任した大名のもとで作成された文書は所司代離任にもなつて国元に引き上げられるため、各大名家に分散して伝来する。すなわち、所司代の基礎研究のためには、

各大名の藩政文書のなから所司代関連の史料調査を行う作業が必要なのである<sup>④</sup>。

こうした研究状況の中、筆者は越後国長岡藩の藩政文書をもとに所司代に関する基礎研究を行なつてきた。例えば、所司代に就任した際、老中が所司代に発給する二通の覚書について、以前筆者は史料紹介を行ったことがある<sup>⑤</sup>。

前稿では、天保十一年（一八四〇）一月一三日に所司代に任じられた越後国長岡藩主の牧野忠雅へ老中が発給した二通の覚書<sup>⑥</sup>を紹介し、覚書について以下の三点を指摘した。①覚書発給の日が、忠雅が江戸城で将軍家慶から上京の暇をもらい、京都へ出立した二月二日であること。②覚書の一通は、將軍の意を受けて老中が所司代に出した、所司代の職掌規定の覚であるのに対し、他の一通は、覚で規定された職掌を所司代が遂行するにあたり、心得ておかねばならない点を老中

が所司代に示した覚であること。③二通の覚書とも、発給人である老中の花押は据えられておらず、本紙裏の継ぎ目に発給人の印が捺されていること<sup>⑦</sup>。また、所司代が京都で形成する家臣団について検討し、長岡藩の藩士が家老、用人、公用人などの役職に就いていたことや、それぞれの役職の格式などについて明らかにした<sup>⑧</sup>。

本稿では、所司代就任経験がある長岡藩以外の大名の藩政文書を素材とし、所司代についての基礎研究を蓄積することを目的としている。具体的には信濃国上田藩の松平家文書<sup>⑨</sup>から所司代関連文書を紹介し、以下の三点を明らかにする。①所司代就任から京都での職務引継ぎの過程。②所司代就任時に幕府から発給された二通の覚書について。③所司代の在京賄い領。また、合わせて若干の分析と課題の提示を行いたい。

## 第一章 松平忠周の所司代就任過程

### 第一節 所司代就任と上京

松平忠周が所司代に就任したのは享保二年（一七一七）九月二七日である<sup>⑩</sup>。当時、忠周は在江戸であった。九月二六日に上田藩上屋敷へ老中奉書が到来し、「明廿七日、御登城

被成候様」と登城が命じられた<sup>⑪</sup>。翌二七日、江戸城では老中に昇進した所司代水野忠之の跡役として松平忠周が所司代に任じられた。忠周が、京都への暇を將軍吉宗からもううのは享保二年十一月一日である<sup>⑫</sup>。

江戸を出発するのは享保二年十一月一六日で、將軍から拝領した馬に乗り、芝元札之辻にて駕籠に乗り替えた。その後、東海道を西に向かい、浜松からは本坂通を経由して十一月二七日に近江国草津宿に止宿、二七日朝六ツ時に大津陣屋大坂屋加右衛門へ到着した<sup>⑬</sup>。翌二八日朝六ツ時前に大津を出発し、山科御廟野からは出迎えの雑色五人が先払いをするなか<sup>⑭</sup>、三条通りを堀川通りまで進み、石橋を渡り右に折れ、上使屋敷の前から二条の馬場へ入り、四ツ時前に所司代屋敷に到着した<sup>⑮</sup>。忠周の上京が京都市中に触れられたのは、十一月二十日のことであり、寺社方諸礼の日限を追って知らせる旨を伝える触と<sup>⑯</sup>、二八日頃に上京するので、以前から所司代を出迎えて来た者は先例の場所（山科御廟野）へ罷り出るよう伝える触であった<sup>⑰</sup>。

### 第二節 京詰め家臣団

所司代に任じられて以降、上田藩は京都への赴任のため

様々な準備に取りかかる。その一つとして、京詰めの家臣を決定する必要があった。上田藩の場合、大きく分けて、A忠周の京都上洛より先に江戸から京都に先乗りする家臣、B忠周の上洛に随行して江戸から上洛する家臣、C上田から上洛する家臣、の三タイプに分かれていた。

表1は「会所日記」「歓喜院」より作成したAタイプの家臣の一覧である。一〇月一五日から十一月一五日まで七回に分けて先乗りの家臣が江戸を出発している。なお、石高の欄は「高列分限帳」<sup>18)</sup>によって作成した。この分限帳の表紙には「上田六」と書かれており、表に石高の記載がある家臣は国元詰めの家臣で、記載がない者は江戸詰めの家臣である。したがって、江戸から先乗りする家臣は国元詰めと江戸詰めの家臣とで構成されており、最初に京都に向かった家臣は国元詰めであったことが指摘できる。<sup>19)</sup>また、十一月八日には関札（宿札）を持参した家臣が出発し、忠周出発の前日である十一月一五日には宿割りを担当する家臣が出発し、忠周上洛の手はずを整えていった。

表2は「会所日記」「歓喜院」より作成したBタイプの家臣の一覧である。「高列分限帳」および享保四年頃の「御分限帳」<sup>20)</sup>によって石高を記載した。Aタイプ同様、国元詰めと

江戸詰めの家臣から構成されている。<sup>21)</sup>また、士分の内、一五〇石以上は騎馬で、それ以下の士分は乗掛で入京している。また、儒者や医師と思われる人物は駕籠で入京している。

Cタイプの家臣は、表1、表2では名前が見られないものの、「会所日記」「歓喜院」より大津から京都へ供奉したことが確認できる家臣である。蜂屋一郎兵衛（二〇〇石）、井上四郎左衛門（二五〇石）、佐治八右衛門（二〇〇石）の三名である。何れも国元詰めの家臣であることから、国元から江戸を経由せず大津から忠周に供奉して上洛した家臣に合流したものと判断した。

以上二節にわたり、所司代就任から入京までの過程、および京詰め家臣団の構成について明らかにした。

## 第二章 信濃国上田藩松平家の覚書

第一章で述べたように、松平忠周が將軍吉宗から京都への暇をもらったのは享保二年十一月一日である。同日松平忠周は、五名の老中から二通の覚書を受け取っている。<sup>22)</sup>先ずは全文を紹介したい。<sup>23)</sup>

## 【史料1】

(包紙)

[寛書 二通]

(a)

覺

(第一条) 一、上使参 内并八朔御太刀・御馬御進獻之節之儀者可任

近例事

(第二条) 一、公家門跡方領知の公事訴訟等、両伝 奏より伊賀守迄

(松平忠周)

(第三条) 一、両伝 奏江 上使振舞之節、伊賀守相伴に被相越候儀

ハ無用に候、勿論堂上方・門跡方江振舞之儀も右同断

之事

(第四条) 一、二條御番代之時ハ、御目付斗罷越、伊賀守儀者御番入

替候以後可被参事

(第五条) 一、二條御藏御金入置候所、大御番頭并東西御門番之頭立

合、封印可付置事

(第六条) 一、上方諸役人江戸江参上之儀、其外何にても願之儀如先

規伊賀守江伺之、伊賀守より言上候様可被仕事

(第七条) 一、畿内并近江・丹波・播磨八ヶ国之公事・訴訟等、町奉

行僉議之次第伊賀守可承之、若町奉行所にて相決かたき事、又ハ重き儀ハ伊賀守宅におゐて町奉行、在京之

御目付、或ハ伏見奉行寄合之上裁許あるへき事

(第八条) 一、耶蘇宗門堅為御制禁之間、弥入念町奉行可相改事

(第九条) 一、京都伏見之町々居住之浪人等、先例に任せ沙汰有へき

事

(第十条) 一、女手形之儀、堂上方并御直参之面々ハ伊賀守可被出之、

京都町中・山城・丹波・近江国中より出候分者、町奉

行手形可出之、伊賀守在江戸之節ハ、堂上方并直参之

面々、先規之通町奉行可出之候、且亦西国筋より罷下

候分ハ伊賀守可被出之候、伊賀守在江戸之時ハ跡々之

通町奉行より手形可出之事

(第十一条) 一、火事出来之節、御所方并二條御城於近所者伊賀守被

罷出、其外所々江ハ町奉行一人相越、伊賀守ハ家来并

与力・同心之者斗可被出之、但及大火候ハ、町奉行

両人共二罷出、伊賀守も見合次第可被罷出事

右之條々達 上聞、書面之通被 仰出候間、可被得其意

候、以上

享保二年十一月朔日

(忠之)  
水野和泉守  
(忠貞)  
戸田山城守

久世<sup>(重之)</sup>大和守  
井上<sup>(正岑)</sup>河内守  
土屋<sup>(政直)</sup>相模守

松平伊賀守殿

(b)

一、<sup>(第一条)</sup>禁中并公家衆作法之儀、前々被

仰出御法度書弥相違無之様ニ可相心得事

一、<sup>(第二条)</sup>禁中方江被附面々、御所方御作法諸事承候様ニ可被

申渡事

一、<sup>(第三条)</sup>公家衆・諸大名と内縁有之面々、家作其外定式之儀ニ

至而も格別ニ取持たれ候儀者有之間敷事

以上

享保二年十一月朔日

水野和泉守

戸田山城守

久世大和守

井上河内守

土屋相模守

松平伊賀守殿

前稿で紹介した越後国長岡藩の二通の覚書（天保一一年（一八四〇）二月二日付）とほぼ同文であるが、相違点を指摘しておく。

一点目は文言の違いである。覚書(a)の第七条傍線部である。信濃国上田藩の覚書では「畿内并近江・丹波・播磨八ヶ国之公事・訴訟」となっている箇所が長岡藩の覚書では「山城・大和・近江・丹波四ヶ国之公事・訴訟」となっている。これは、享保七年の国分けによって、裁判管轄が変更されたことに対応した変化である。国分けによって京都町奉行所が持っていた上方八ヶ国の公事・訴訟の権限が縮小され、国分け後は大坂町奉行所が摂津・河内・和泉・播磨四ヶ国の公事・訴訟を管轄し、京都町奉行所の管轄が山城・大和・近江・丹波四ヶ国となったため、文言が変化したのである。<sup>24)</sup>

二点目は欠字、平出の遣われ方に変化が見られる。上田藩の覚書(a)第三条の「上使」と文末の「上聞」、および覚書(b)第二条の「御所方」はいずれも欠字となっているが、長岡藩の覚書では何れも平出となっている。上田藩の覚書よりも長岡藩の覚書の方が將軍および禁裏に対する敬意をより払う用法へと変化している。

また、発給人である老中が花押を据えず、紙の継ぎ目に押

印する様式の文書について、他の役職の事例を紹介したい。<sup>(25)</sup>

寛永一八年（二六四一）三月二十九日付で長崎警備に関わって筑前国福岡藩の黒田忠之に対して出された七カ条の覚書を記した記録には、「此覚書、伊豆守様・豊後守様・対馬守様御連名御判ハ無之、豎紙継目ニ御三人之御印形在」との注記がなされ、所司代の覚書と同じ様式の覚書が老中松平信綱、阿部忠秋、阿部重次によって出されている。この覚書が発給された経緯について述べておきたい。寛永一八年、黒田忠之は長崎守護を二月八日付の老中奉書で命じられた。この奉書は二月一九日に福岡に到着し、二月二六日に福岡藩は江戸へ使者を遣わし、質問をまとめた「覚書」を持参したのである。「御老中松平伊豆守様、阿部豊後守様、阿部対馬守様え以御覚書御窺被成候処、各御披見之、右覚書之箇条別紙ニ々々被記之、加奥書御使者ニ被相渡之」との注記があるように、三人の老中は、福岡藩が持参した質問状（「覚書」）を別の紙に転記し、奥書に加え、花押を据えず継目に捺印したものを回答書として福岡藩の使者に渡したのである。<sup>(26)</sup>

長崎警衛の事例から類推すると、所司代の二通の覚書も職務内容の質問に対する回答書という性格を帯びたものだった可能性が指摘できる。この点についてはさらなる事例収集が

必要であろう。

### 第三章 所司代の在京賄い領について

上方での役職に就いた場合、在京賄い領が与えられることがある。在京賄い領とは、上方での必要経費を賄うために畿内・近国に与えられる所領であり、在上方の大名は在京賄い領からの年貢収入を必要経費に宛てると共に、必要な武家奉公人を在京賄い領から徴発する。<sup>(27)</sup>国元からの送金や現夫の移動の必要がなく、経費削減が可能となり、在京賄い領のメリットは大きかったと言えよう。

松平忠周の場合、「（享保二年）十二月二十四日所領のうち、一万石を近江国浅井・伊香両郡のうちにて加へたまはる」と近江国で在京賄い領を与えられた。所領は幕領の中から与えられ、浅井郡の一カ村を代官内山七兵衛から、浅井郡の二カ村を代官上林又兵衛から、伊香郡の一五カ村を代官石原清左衛門から引き継いだ。<sup>(28)</sup>三名の代官が松平忠周の家臣勝俣新五左衛門、広瀬金五郎、岩崎忠右衛門に宛てた引き継ぎ帳面が三冊作成された。それぞれの帳面には、引き渡される在京賄い領の村々の村名、石高、諸引高、年貢高等が記載されている。相給の村の一部を引き渡された場合、他の領主の名前

も記入されている。三冊共に代官の捺印があり、原本である。表3は松平忠周に与えられた在京賄い領の村々の一覽である。

さて、この所領の引き渡しに際し、代官上林又兵衛が松平忠周の家臣に宛てた文書を紹介しよう。<sup>30)</sup>

【史料2】

近江国浅井郡之内

一、高百六拾五石五斗九升九合

速水村

一、高百五拾貳石四斗六合

月ヶ瀬村之内

高合三百拾八石五合

右者松平伊賀守在所京都江程遠不勝手二付、取来候信州

上田領之内、川中島老万石今度江州ニ而御引替被下候ニ

付、為代地右之所高壹万石之内、従去酉年物成被下之候

間、郷村可被相渡候、御老中御証文者御勘定所ニ差置如

此候、以上

享保三年戊四月

鈴木弥惣右衛門 印

上方江被遣候

吉田佐兵衛

就御用無加印

木村四郎兵衛

印

正木藤右衛門 印

稲葉与一右衛門 印

奥野忠兵衛 印

上林又兵衛殿

----- (紙継、裏に上林又兵衛の割印あり) -----

右御勘定所御証文之通、郷村去西十二月御引渡申候得共、

御証文請書只今相渡、去暮御渡被成候仮御証文与、今度

引替被下候故、如斯御座候、以上

享保三年戊五月

上林又兵衛(印)

松平伊賀守殿御内

篠原又右衛門殿

勝俣新五左衛門殿

岩崎忠右衛門殿

継目より前は、勘定方組頭七名が代官上林又兵衛へ郷村引き渡しを命じた文書が引用されており、継目より後で、享保二年の暮れに渡した「仮証文」とこの度の文書とを引き替えるよう指示している。

注目すべきは傍線①で近江で所領を与える理由が、松平忠

周の在所から京都までが遠く、藩財政にとって良くないことだとされており、明確に在京賄い領として与えられる所領だと勘定方の役人が認識している点である。もう1点は、傍線②に近江の所領を信州川中島一万石の所領と引き替えると述べている点である。先に引用した『寛政重修諸家譜』には一万石を「加えたまわる」となっており、一万石の加増だと記しているがこれは誤りである。

享保九年二月一日に忠周は老中に昇進するが、在京賄い領はそのまま上田藩の所領のままであった。近江の所領が信州川中島の所領と再び交換されるのは松平忠周の次の藩主忠愛の時であった。<sup>(32)</sup>『寛政重修諸家譜』には「(享保)十四年十月八日近江国の所領を転じて信濃国更科郡のうちに移さる」とある。実際に近江の所領が引き渡されたのは、享保一五年五月であった。浅井郡の六〇一四石九斗九升は代官多羅尾治左衛門に、伊香郡一四カ村は代官辻甚太郎引き渡された。多羅尾が郷村を受け取った旨を記した「覚」(享保一五年五月付)を、辻も郷村受け取りの書付(享保一五年五月一九日付「近江国伊香郡郷村高帳」)を忠愛の家臣井上四郎左右衛門、野田喜兵衛、岡本十右衛門宛に出した。<sup>(33)</sup>

本章では、上田藩の在京賄い領に関わる史料を紹介し、忠

周の所司代就任にともなうて在京賄い領を与えられたことを指摘した。ただし、多くの所司代就任者は大坂城代から所司代へ昇進するが、忠周は大坂城代を経験していない点に留意する必要がある。例えば、宝暦二年(一七五二)四月七日に大坂城代に就任した上野国高崎藩の藩主松平輝高は同年四月に蒲原郡四一カ村が上知となり、摂津国有馬郡五カ村、豊嶋郡六カ村、川辺郡四カ村、河内国茨田郡一三カ村、播磨国宍粟郡一八カ村、加西郡二六カ村を替え地として与えられる。<sup>(34)</sup>輝高は宝暦六年五月七日に所司代となり、宝暦八年一〇月一八日には老中となる。宝暦一〇年三月六日に老中在職のまま死去する。大坂城代役知領はそのまま京都所司代の在京賄い領に引き継がれる点に注目したい。つまり、所司代の在京賄い領は大坂城代の役知領とセットで考える必要があることを指摘しておきたい。

また、輝高の老中就任後も引き続き在京賄い領は高崎藩領のままである。役職就任を契機として成立する役知領は、役職から離れると同時に上知になるのではない。この点は、役知領や在京賄い領が与えられることの意味を考える素材となりうると考えている。<sup>(35)</sup>



## おわりに

信濃国上田藩の松平家文書から所司代関連の史料を何点か紹介し、第一章では所司代就任から上洛までの経緯や、京詰め家臣団について明らかにした。第二章では、老中から渡される二通の覚書について検討を加え、上方の支配機構の変遷にもなつて覚書の文言が変化することを明らかにし、文書様式についても言及した。第三章では在京賄い領に関わる史料を紹介し、事実確定を行った。

断片的な史料の紹介に終始し、十分な立論が出来なかった。しかし、所司代研究は、現状では史料の発掘と基礎事実の積み重ねが必要な段階である。いくつかの藩の藩政史料について所司代関連史料の残存状況を調査したが、非常に断片的な史料しか残されていないとの印象を強く持った。今後は、所司代が作成する文書総体を把握し、各藩の所司代関連史料から明らかにする断片が文書総体の中でどう位置付けられるのかを検討する作業が不可欠のものになろう。その作業を経て所司代の基礎研究を進める必要がある点を指摘しておきたい。

- (1) 所司代は京都所司代と称されることもあるが、正式な

松平忠周の所司代就任と幕府発給文書について

職名は所司代である。江戸時代の各種史料では京都を冠さず所司代と記されるのが原則である。

- (2) 中近世移行期の所司代についての基礎研究である伊藤真昭『京都の寺社と豊臣政権』（法蔵館、二〇〇三）、幕末維新期の政治史的関心から所司代を取り上げた仙波ひとみ「幕末における議奏の政治的浮上について―所司代酒井と議奏「三卿」―」（『文化史學』五七、二〇〇一）、近世中期における朝幕関係の検討に際して所司代の役割に關説した藤田覚『近世政治史と天皇』（吉川弘文館、一九九九）など。

- (3) 例えば京都総合資料館所蔵の「旧幕府関係資料」が挙げられる。この文書群は一〇〇通からなり、「京都府の旧一号書庫に収蔵されていたもので、明治新政府が成立した当時に所司代をはじめとする旧幕府諸機関から京都府に移管されたと考えられる文書である。」（『京都府立総合資料館所蔵文書解題』一九八五）。

- (4) 各大名が所司代として京都で行った行政などは、その大名の居所があった地域では余り関心を持たれない傾向にあり、自治体史などで言及されることも少なく、史料の伝来状況そのものが十分に明らかになっていない。

- (5) 拙稿「牧野忠雅の所司代就任と老中連署の二通の覚書」（『長岡郷土史』四一号、二〇〇四）。以下、前稿と記す場合、この論文を指す。

(6) 蒼紫神社文書<sup>11)</sup>。

(7) 前稿では長岡市立図書館文書資料室のコピーによって閲覧し、実際の文書は閲覧していなかったため、割印の有無については判断を保留した。ただし、享保二年(一七二七)

に所司代に就任した信濃国上田藩の松平忠周が受け取った覚(上田市立博物館編『松平氏史料集』一九八五、五五頁)に、紙の継目に発給人である老中の割印が捺されていることから、越後国長岡藩の覚書にも割印があるものと推測した。その後、蒼紫神社で原文書を拝見する機会があり、割印があることを確認している。

(8) 拙稿「所司代就任期の長岡藩家臣団―京詰め藩士を中心に―」(『長岡郷土史』四二号、二〇〇五)。その他所司代関連の論考として「所司代巡見触の基礎的研究」(京都造形芸術大学歴史遺産研究センター『紀要』四号、二〇〇五)を発表している。

(9) 「松平家文書」は長野県上田市立博物館蔵で、「信濃国上田松平家文書」(一九七六)として同館から目録が刊行されている。以下、「松平家文書」を典拠とする場合は、「松平家文書」一四三のように同目録の文書番号を併記する。

(10) 「柳営日次記」享保二年九月二七日条。

(11) 「忠周公治世会所日記写」(「松平家文書」一九八。この会所日記は忠周が藩主であった天和三年(一六八三)から享保一三年までの記事に加え、忠周の年忌法会など元文五

年(一七四〇)までの記事が収録されている。「日記」という表題が付いているが、日々書き継いでいったものではなく、後日まとめられた記録である。

会所日記の表紙には「掛山蔵」と記されている。掛山家は松平家が駿河国田中に居所があった寛永年間に召し出され、享保二年には石高二〇〇石の家であった。当主の中には用人や留守居など、藩の要職を勤める者もあり、代々物頭となる家格を持った家である。以下本書からの引用については典拠を「会所日記」と略記する。

なお、「会所日記」の草稿と思われる「歛喜院忠周公御代」(「松平家文書」五八二)という冊子もあるが、この冊子は目録に掲載されていない。「会所日記」よりも記述は詳細であり、加筆修正の書き込みが見られる。以下、「歛喜院」と略記する。

(12) 「歛喜院」。

(13) 「会所日記」。

(14) 「歛喜院」。雑色が「鉄炮引、御先弘」と注記されているが、「鉄炮」とは「鉄棒」のことであろうか。「鉄棒(かなぼう)」は「てつぼう」とも読まれていたことになるが、詳細は不明である。なお、雑色の鉄棒については朝尾直弘「鉄棒曳き―雑色小考―」(朝尾直弘教授退官記念会編『日本国家の史的構造 近世・近代』思文閣出版、一九九五、のち同氏『朝尾直弘著作集』第七巻(岩波書店、二〇〇四)に再

録」を参照のこと。

(15) 「歆喜院」。

(16) 『京都町触集成』第一巻(岩波書店、一九八三)、触番号八七二。以後、『町触』①―八七二と略記する。

(17) 『町触』①―八七三。

(18) 「松平家文書」九九―一二五。

(19) 先乗りとして上洛した家臣は、所司代の職務内容を所司代与力や右筆に問い合わせを行ったものと思われる。元禄四年(一六九一)に所司代に就任した上野国高崎藩の松平信興の場合、先乗りした家臣が、所司代与力安井茂兵衛や、右筆茶屋宗古に問い合わせを行っている(高崎市歴史民俗調査会編『高崎史料集 大河内家文書(無銘書二)』高崎市教育委員会、一九八六)。

(20) 「松平家文書」九九―一二六。足軽以下の分限帳で、国元詰めの方が記載されていると推測される。

(21) 足軽以下の石高の典拠である「御分限帳」は享保四年のものであるため、上洛時点の状況を示していないが、足軽以下も士分同様、国元詰めと江戸詰めの家臣から構成されていたと考えている。

(22) 前稿で暇の日と覚書の日が同一だと指摘したが、上田藩の場合も当てはまる。

(23) 「松平家文書」二八二。覚書(a)の継目の印は水野が一番下に捺されており、発給人の署名順(前から後)に上へと

捺され、土屋が一番上に捺印している。

(24) 享保の改革期における幕府上方支配機構の権限の変化については村田路人「幕府上方支配機構の再編」(大石学編、日本の時代史一六『享保改革と社会変容』吉川弘文館、二〇〇三)を参照のこと。

(25) 以下の事例は、福岡市総合図書館文学・文書課古文書掛編『忠之公御代日記』(二二)、『福岡市総合図書館研究紀要』第六号、二〇〇五)による。『忠之公御代日記』は筑前国福岡藩の藩主黒田忠之が藩主在任中に発給した文書や、忠之が受け取った文書を引用し、編年体で編纂したものである。なお、史料の引用に際し句読点などを改めたところがある。

(26) 七カ条の質問の後に書き加えられた奥書は以下の文面である。「右従其方被指越候覚書之通、何も得其意候、其元勝手次第第二尤存候、雖然近日井上筑後守長崎へ被相越候間、万事可有相談候、以上」

(27) 在京賄い領は、役職に就任した場合に与えられることから役知領と呼ぶこともある。大坂城代などに就任した大名にとって、大坂周辺の役知領から武家奉公人を徴発することが役知領の意味を考えるうえできわめて重要だと岩城卓二氏が指摘している(同氏「在坂役人と大坂町人社会―大御番頭・大御番衆・加番を中心に―」(大阪教育大学『歴史研究』三九号、二〇〇二)、のち同氏『近世畿内・近国

支配の構造』（柏書房、二〇〇六）に収録）。また、筆者は伊勢国津藩の藤堂氏が山城・大和に与えられていた在京賄い領について分析した論考を準備している。

(28) 『寛政重修諸家譜』第一。

(29) 「江州御領分四年御取箇帳御代官所存書付入」（松平家文書）一四九—四四。

(30) 「松平家文書」一四九—一六。

(31) 「歎喜院」には、「信州川中島老万石之御知行御預二而被差上、此御代地江州伊香郡・浅井郡二て御請取被遊候」とあり、加増ではなく替え地であることが確認できる。

(32) 忠周は享保一三年四月晦日に没し、同年六月一五日に忠愛が遺領を継いでいる（『寛政重修諸家譜』第一）。

(33) 「松平家文書」一四九—一〇。この文書には「享保十五年戌三月、江州御領分を御代官所江引渡候節、御代官様請取寛式通」と記した包紙があり、本来は多羅尾の「覚」と辻の「近江国伊香郡郷村高帳」が包まれていたと考えられる。しかし、調査時点では近江の所領に関する他の文書も何点か包まれていた。

(34) 「御領地調写 全」（東京大学経済学部図書館蔵）。以下、高崎藩の所領の変遷は当該史料による。なお、群馬県立文書館の写真帳で閲覧した。

(35) 役職から離れた後にも役知領や在京賄い領が継続して所領であり続けると言うことは、逆に役職に対応する役知

領や在京賄い領が固定していたわけではない。例えばある村の領主が必ず所司代就任者だという固定の関係があるのではなく、所司代就任者にある条件が整った場合、在京賄い領が設定されることになる。こうした「条件」について明らかにすることも今後の課題である。

#### 【付記】

史料調査に際してご高配を賜りました上田市立博物館に謝意を申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金・若手研究（スタートアップ）「京都所司代の行政機構に関する基礎研究」（二〇〇六—二〇〇七年度、課題番号一八八二〇〇四九）の成果の一部である。

表1 京詰め家臣団（先乗りの面々）

江戸出立	家臣名	石高（石）	備考
一番立 10.15	戸祭十郎左衛門	200	
	山村源八	200	
二番立	成瀬孫大夫		
	野村長兵衛		
	速水又右衛門	*米6石2人	足輕
三番立	天野友左衛門	150	
	奥村伝七		
	段藏		仕立方
四番立	藤谷三之丞		
	石川三右衛門		
五番立 11.8	江守弥左衛門	200	関札
六番立 11.11	波多野六郎左衛門	100	
	平子庄藏		
七番立 11.15	小島八郎右衛門	100	宿割
	勝俣新五左衛門	80	

注1. 「会所日記」「歓喜院」によって作成した。  
注2. 家臣の石高は享保2年7月の「高列分限帳」に基づいた。  
注3. 石高に\*のあるものは享保4年頃の「御分限帳」に基づいた。

表2 京詰め家臣団 (供連れの面々)

家臣名	石高	家臣名	石高	家臣名	石高	家臣名	石高	家臣名	石高
岡部九郎兵衛a	600石	千葉織部	300石	中根次郎右衛門	250石	外村七郎兵衛a	200石	横田地段之進a	200石
三刀谷半藏a	200石	矢嶋友右衛門a	200石	佐竹市右衛門a	200石	中根与左衛門a		内藤甚七a	
田淵藤左衛門	150石	一色東藏a	150石	山村孫次郎c	130石	大井三郎右衛門a	200石	磯川儀右衛門c	100石
岡本左大夫c	100石	村上定之進c	100石	松原十太左衛門c		山田善左衛門c	150石	岡本只右衛門c	80石
内田三郎左衛門c		河合源六c		成田小一左衛門c	80石	彦坂四兵衛c		加舎忠兵衛c	100石
村上平藏	100石	岡部才右衛門		外村友次郎		戸倉助右衛門	*5両5人	多田又之進	
服部小七郎	*5両3人	野間政右衛門	*5両3人	村松左中		長谷川長仙b	200石	村上松固b	200石
和田養軒b		小瀬玄庵b		駒田舎人	7人	松井安右衛門		大野木恒之丞	*5両5人
高瀬山三郎		土屋又之助		山本権平	*5両3人	岡十右衛門		山本方左衛門	
榎尾三之丞		森田庄左衛門		下村義大夫		吉形又右衛門	80石	高坂武兵衛	80石
武宮可左衛門		白瀬甚左衛門	15人	有賀庄左衛門		鶴沢小左衛門	50石	井上重兵衛	
平野次郎大夫		富川定七		加藤舎人		石川清三郎	*米7石3人	相林甚介	*6両2人
岩崎忠右衛門		荻野織右衛門	*米8石2人	手塚義右衛門		寺尾藤十郎		鈴木藤次郎	
森六兵衛		桂左一郎	*米8石3人	岡本三可	*米7石3人	藤田円可	*米8石2人	門倉伝二郎	*米7石3人
妹尾小右衛門	*米10石3人	高橋半大夫	*米10石3人	北山市郎兵衛		祐可	*米5石2人	喜三	
女可	*3両2人	久弥		久齋		永井孫平(目付)c	130石	鷲見宇大夫(目付)c	80石
山田幸右衛門		稲垣林右衛門	*米8石3人	崎尾富右衛門	*米8石3人	平野数右衛門		永儀九郎大夫	

注1. 家臣名は「会所日記」「歓喜院」によって作成した。

注2. 家臣の石高は享保2年7月の「高列分限帳」に基づいた。

注3. 石高に\*のあるものは享保4年頃の「御分限帳」(「松平家文書」99-26)に基づいた。

注4. 石高の欄で3人は3人扶持を意味する。

注5. 名前の後にaとあるのは騎馬で入洛した者、bとあるのは駕籠で入洛した者、cとあるのは乗掛で入洛した者である。

表 3 近江国の在京賄い領の村々一覧

郡名	村名	石高(石)	相給領主	代官
浅井郡	平塚村*	174.92	実宰院	内山 七兵衛
	瓜生村	495.524		
	田川村	685.268		
	山前村	420.41		
	三川村*	246.305	稲垣長門守・大久保佐渡守	
	三川村*	117.293	西郷市正	
	大寺村*	624.78	大久保佐渡守	
	曾根村*	300	小堀備中守	
	加村*	418.779	井伊掃部守	
	川毛村	1011.388		
	速見村	1198.709		
	小計	5693.376		
	速見村	165.599		上林 又兵衛
	月ヶ瀬村*	152.406		
	小計	318.005		
伊香郡	渡岸寺村	279.561		石原 清左衛門
	柏原村	526.3		
	柏原村（井口村出作分）	396.81		
	井口村*	454.915	土屋相模守・本多下総守	
	東物部村*	53.111	井伊掃部守	
	西物部村*	213.05	井伊掃部守	
	西阿閉村*	760.899	安藤彦四郎・井伊掃部守	
	片山村*	10.361	井伊掃部守	
	西柳野村*	30.97	松平伊豆守	
	礪野村*	222.353	本多下総守	
	布施村*	198.124	井伊掃部守	
	高田村*	212.39	安藤彦四郎・井伊掃部守	
	中郷村*	378.815	井伊掃部守・本多下総守 植村土佐守・保科兵部少輔	
	八戸村	197.84		
	川並新田	46.12		
	小計	3981.619		
合計		9993		

注 1. 「江州御領分酉年御取箇帳御代官所方書付入」（「松平家文書」149-4）より作成した。

注 2. \*印を付した村は相給村落である。